

甲奴郷土史だより

第 28 号
2022 年 10 月
甲奴郷土史
研究会発行

報告
三次市出前講座

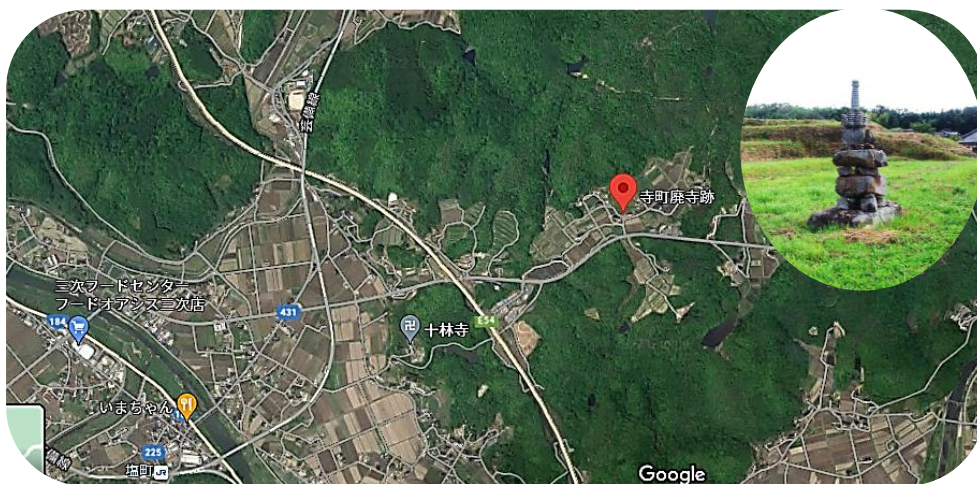
次世代に伝えよう 貴重な文化財 『寺町廃寺』

鶴本節子

コロナウィルス感染症のため開催できなかった研修会や研修旅行。今回三年ぶりに祇園祭が本格的に開催されたこともあり、感染防止に気を付けながら研修会を開催した。興味深い内容で、もつと寺町廃寺について勉強したいと思った。

寺町廃寺跡について

飛鳥時代末期に建てられ、平安時代まで存在したと考えられる古代地方寺院。平安時代前期に奈良薬師寺の僧侶景戒(けいかい)によつて編集された我が国最古の仏教説話集『日本霊異記』に記されている三谷寺と推定される。『日本霊異記』では、「かつて百済が乱れたとき、備後の国三谷郡の大領が、百済を救うため現地に派遣されることになったので出征するに当たり、もし自分を無事に凱旋させてくださるならば、お寺を建て



◆上：寺町廃寺跡地図

◆左：上の地図の拡大したもの



◆右：看板など

仏像を造ってお礼を申しましようとお願したところ、無事に凱旋することができましたので、弘済禅師(こうさいぜんじ)を伴って帰国し、三谷寺を建てました。」とあり、古代の地方寺院としては珍しく寺名と創建者をうかがい知ることができる。現在、寺院跡にいくと様々な石で積み上げられた塔のようなものがひっそりと立っている。

〈研修会・報告〉

史跡『寺町廃寺跡』は、中国地方を代表する古代の地方寺院。昭和五九年に国の史跡に指定され、三次市教育委員会では八次にわたる発掘調査を実施。全国的にも稀有な成果が多く得られている。

研修会は、事前に近藤会長より寺町廃寺跡の時代背景を説明してほしいというリクエストもあり、左記のような内容で進められた。

- ① 三次市の文化財と寺町廃寺跡
- ② 古墳時代の終末と花開く「仏教文化」
- ③ 寺町廃寺跡における調査の歩み
- ④ 寺町廃寺跡における発掘調査の成果
- ⑤ 寺町廃寺跡の価値

この寺町廃寺跡について、「三谷寺」説の登場から、来年で二〇二〇年を迎える。その間の研究において、明治三六（一九〇三）年に明治・大正時代の地誌学者、法制学者の村岡良弼氏が、寺町廃寺跡を「三谷寺」に比定し、また同時代の歴史学者・吉田東伍氏も同様の指摘をした。昭和一二（一九三七）年には県史跡に指定。指定文に「三谷寺」説の紹介がある。

昭和五三（一九七八）年に遺跡周辺で県営圃場整備が計画され、緊急的に調査を実施されたことから始まった発掘調査。中枢伽藍の遺存状態が非常に良好で、中国地方では稀な事例であったことから、昭和五九（一九八四）年五月に国史跡に指定される。

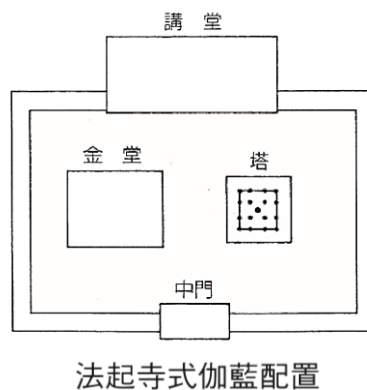
平成三十（二〇一八）年度から、史跡の保存・活用を目的と

した整備事業を再開され、この度一、八次の発掘調査成果を整理した発掘調査総括報告書を刊行された。この報告書は、三次市立図書館へ二冊寄贈されたとのことで、閲覧することが可能になる。

国史跡に指定された「中枢伽藍」の遺存状態が非常に良好な状態だったためだが、この伽藍の様式については『法起寺式伽藍配置』である。中門からみて、西側に金堂、東側に塔、背面に講堂が配置してある。

法起寺は奈良県の斑鳩にある寺で、『聖徳太子伝私記』に引用された『法起寺塔露盤銘』によると推古天皇三十（六二二）年に聖徳太子が山本宮（岡本宮）を寺に改めるよう山背大兄王に遺言したことにより建立されたとされる。

『法起寺式伽藍配置』は、全国の地方寺院で最も多くみられる配置を採用しており、法隆寺の西院伽藍と同じ建物配置の設計で、大和で一級の寺院跡で採用された設計手法を採用するなど流行を先取りした最新鋭の寺院だったそう。



◆左：法起寺



寺町廃寺跡の発掘調査の成果として建物跡では、

●金堂跡：基壇、階段、燈籠の跡

●塔跡：基壇、階段の跡

●講堂跡：基壇、階段の跡(第二次発掘調査)

●回廊跡：基壇

そして、出土した遺物のなかに、国史跡に指定された理由のひとつである特徴のある【水切り瓦】が発掘されたことである。

『軒丸瓦の下端に突起をもつ、いわゆる「水切り瓦」の出土地として著名である。これまでの発掘調査では、伽藍中枢部が非常に良好な状態で発見され、**このような事例は中国地方では極めて稀であり、仏教文化のあり方を考えていくうえで欠かすことのできない寺院跡である。**』(文化庁 一九八三『月刊文化財』十二月号)とあり、同様の水切り瓦が備中、出雲からも出土していることから、備中より三次へ范型の移動があり、三次から出雲へ工人の移動があったことが解明された。



軒丸瓦とは、屋根の軒先を彩る瓦のこと。赤い丸の部分が三角形状に尖っている。

尖った頂点で水を切ることができるので、水切り瓦という。

今回は実際のものより型をとった、レプリカを見せて、触らせてもらった。蓮華文が美しい。

寺町廃寺跡の建設には、

・百済の建築技術や瓦製作技術を導入。

・大和の寺院跡の建築技術や瓦製作技術を導入。

また大量に出土した「水切り瓦」は、出雲や安芸、備中南部で出土していることから、発掘調査の成果と『日本霊異記』の内容から、各地域のつながりをつくった人物は、百済の僧弘済ではないか。

寺町廃寺跡が建設された七世紀後半は、地方で爆発的に寺院の建設が進んだが、なぜ地方で寺院が造られたかは未解明のまま。

創建者と創建経緯がわかる日本唯一の地方寺院跡が、寺町廃寺跡である。

《お知らせ》

「史跡寺町廃寺―推定三谷寺跡第一―八次発掘調査総括報告書」刊行記念シンポジウムが開催されます。

◆令和四年十一月十九日(土) 十時～十五時

◆みよしまちづくりセンター

◆参加費無料・事前申込制・定員二〇〇名

*今回の出前講座の資料、シンポジウムのちらしがありますので、ご入用の方は、カーターセンターまでおいでください。

【参考資料】

- ・三次市教育委員会 史跡 寺町廃寺跡
- ・三次市教育委員会 出前講座 史跡寺町廃寺跡の発掘調査について
- ・法起寺

甲奴の伝説と民話

甲奴にまつわる伝説と民話をご紹介。今回は『甲奴町誌 第二集 上川地区』より。

世尊寺にまつわる「砂が淵の竜」

甲奴郡総領町中領家の山中に「砂が淵」という深い淵がある。どんな日照りが続いても、深い水をたたえ、不気味に静まり返っている。この地方の人は、いつの頃からか「この淵には竜が住んでいるから近寄るな。」という噂が伝わっていた。

或る年、日照りの続く年、水が涸れて岩肌を見せるようになった。人々は、この淵を干してみるようになった。部落総出で水かえをした。夕方には水が大部減った。皆すっかり疲れてしまった。あとにどれくらい水があるのか調べてみようということになって、各自自分の六尺褌(ふんどし)をといて、十八本つないで水中に沈めてみた。水底には届かない。あきらめて家に帰った。

さてその晩、淵を中心に物凄い音がした。村人は雨戸を閉めて、夜通し震えた。

さて、ここは庄原高町の世尊寺。水かえをした翌日の昼頃、妙齢の美人が庫裡の戸を叩いている。

「お願いですが・・・旅の者ですが・・・水を一杯飲ませて下さい」小僧さんが茶碗に水を一杯差し出すと、

「この茶碗ではだめ・・・大たらいに一杯!」

小僧さん、大たらいを庭に出して、水をなみなみ入れた。

「しばらくあつちへ行っていて下さい。わたしが水を飲むのをご覧にならないように・・・」

小僧さんは奥へ入った。しかし見たいのが人情。とうとう障子の破れからのぞいてしまった。さっきの美人がすごい大蛇になって、たらいの水をがぶがぶ飲んでいるではないか。小僧さんは驚いて

「ヒヤー助けて!」

と大声を出してしまった。それを見た大蛇の顔の凄いこと。生きた心地はない。眼をつむつて震えていた。大蛇はいつの間にか元の女の姿にかえっていた。

「ご覧になった以上は、仕方がない。妾は領家の砂が淵に长年住み慣れた大蛇です。」

実は、昨日村の人が水をかえると言って、一日中揺動されたので、安隱に暮らすことが出来なくなつた。伯耆の国、日野の大池には私の夫の大蛇が住んでいる。そこへ行く途中です。どうも大変ご迷惑をかけました」

と厚くお礼を言つて世尊寺を立ち去つたということである。

《註》

- ① 原本は世尊寺にある。
- ② 伝説と民族(比婆、庄原編)
・文化新聞社(庄原市本町)



総領町には、別の民話が伝えられている。

むかし、このあたり（砂谷）に、勇気ある弓の名人砂の兵衛が
おりました。

砂谷には原生林と大岩に囲まれ、水はよどんで昼間でもうつ
そうとした珍しい六つの淵があり、そこには七谷にもわたるほ
どの恐ろしい大蛇が住んでいました。

その大蛇は、山から出ては村を襲い、人間にも危害を加えま
した。これを見かねた兵衛は、大蛇を退治してやろうと決心
したのです。

そこで兵衛は鹿の鳴き声に似ているという、ヒキガエルの皮を
七枚重ね合わせた笛を作りました。

ある日のこと、兵衛が笛を吹いて、岩陰に身をひそめて待つて
いると丸獄山の大岩から、大きな鹿を横ぐわえにした大蛇が
現れました。大蛇は、ものすごい目でにらみつめると、兵衛めが
けて襲いかかってきました。兵衛はすばやく弓をつがえ、狙い
を定めて力一杯放ちました。

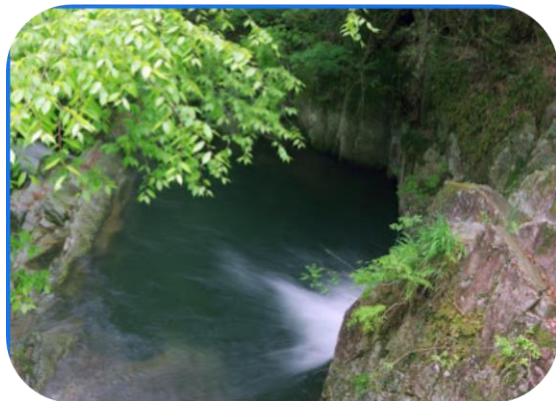
矢は見事大蛇ののどもとに命中して、その大蛇はもんどりう
つて大岩滝に落ち、大波を立てて滝つぼに沈んでいきました。

大蛇を退治して、しばらくたつたある日のこと、兵衛は用が
あつて田総の里に出たその帰り道、一人の美しい娘とであいま
した。

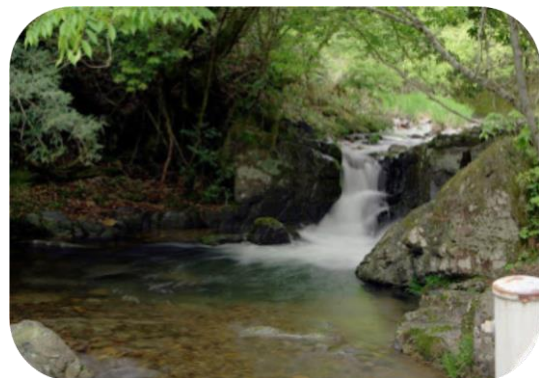
その娘が黒い布切れを取り出して振ると、兵衛はたちまちそ
の毒氣にあてられて、あつという間に倒れ、そのまま息を引き
取ってしまいました。美しい娘は、きつと大蛇の化身だったので
しょう。

砂の兵衛のお陰で、村々は平和になりました。砂谷には、兵

衛の墓や笛を作るために殺したヒキガエルを祀った祠があると
いわれています。



上下の写真：◆砂が淵：庄原市総領町下領家
小さな滝などがあり、紅葉もきれいだそう



中世の山城について 【小童・麓山城】

福山城が昔の姿に戻り、福山市では関連のイベントが続いている。福山駅の新幹線のりばから見え、三の丸だった場所に駅が建っているため、『日本の城で一番多く登城している』と春風亭昇太さんはテレビでおっしゃって、笑いを呼んでいた。

甲奴町には福山城のような立派な城は残っていないが、中世の山城跡が残っている。

中世とは天皇が皇位を後継者へ譲って上皇となり、政務を天皇の代わりに直接行う『院政』の末期から戦国時代までの、十一世紀後半から十六世紀後半までの期間を指す。この時代の有名な中国地方の山城といえば、安芸高田市吉田町にある毛利氏の吉田郡山城と、島根県安来市にある尼子氏の月山富田城だろう。

中世における城は多くの場合山城であった。兵農未分離の時代であり、兵士は同時の農民であった。武将は平時は城付近の館（やかた）に居住し、戦闘が始まると山城によって戦った。

山城の多くは、自然の山の舌状に張り出した大地を利用し、その一部を削って平にして曲輪（くるわ）をつくった。曲輪は二段、三段と階段状に造られ、石垣を築く場合もある。

また、敵が山城へ攻め込むを防ぐために、河を利用したり、場合によっては水を引いて堀をつくる場合もあった。さらに山腹に横ありはV字型に堀切をつくって、敵を攻め上げるのを防いだ。

◆下の図：山城のイメージ

山城は下のイメージ図のような形になっているものが多い。曲輪とは、土塁や堀などの防御施設に囲まれた空間のこと。近世の城では、本丸・二の丸・三の丸など、丸と呼ぶ。

出典：岡山県より

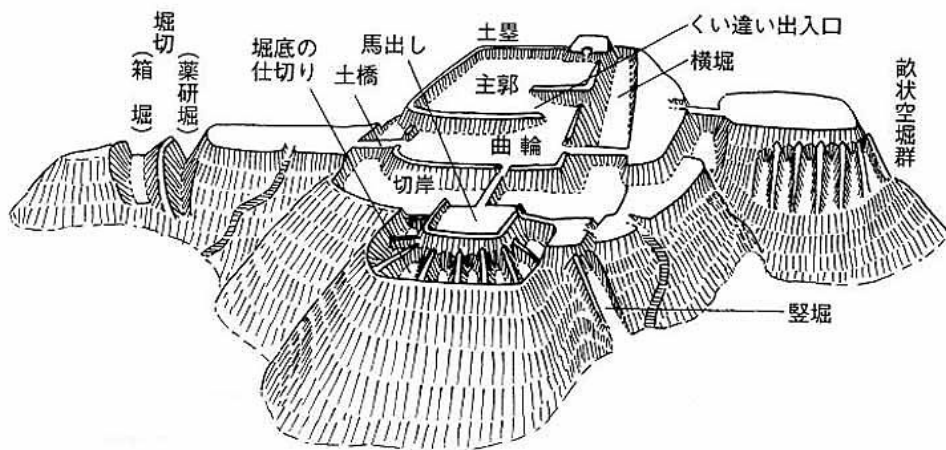


◆上の写真：月山富田城

山の舌状に張り出した部分へ城が築かれた。

この城は、『難攻不落の城』として、有名でお城ファンから人気がある。

出典：blog 水辺遍路より



建物については、近世の城のような天守閣や櫓・門などの大きな建物はなく、多くの場合簡単な掘立柱の建物で、瓦が使われることはむしろ珍しい。あくまでも、戦いの際の防御拠点が多い。

山城には籠城の必要があるため、多くの場合井戸が掘られている。場合によっては食糧の貯蔵穴もつくられた。

町内にも多くの城跡があり、これまでに調査も行われてきた。



◆上の写真：中世の城郭 荒砥城

出典：城とか陵墓とかより

『芸藩通誌』には古城跡として、宇賀村上野山城、小童村麓山城・山根城、『備後古城記』(備後叢書)には、太郎丸村三角山城を挙げている。

麓山城

麓山城は小童麓の県道宇賀矢野線の南側にある。麓山は一名寄藤山ともいう。独立した山で南側は特に険しい。山頂の標高は五八〇メートルくらいである。

曲輪が五、六段あり、本丸の南よりには土塁の跡がある。北側の山の斜面には二本の空堀が掘られており、東側



のものは特に大きい。

麓山城守については

『芸藩通誌』・『世羅郡誌』には長右衛門大夫元則とある。

長氏は長谷部信連

を祖とする。三河国

碧海郡長谷部荘(現

愛知県岡崎市)が本

貫地である。その一族

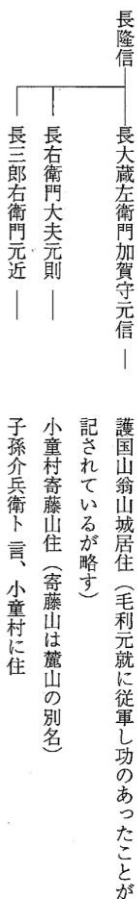
長兵衛尉信連は、一

一八〇(治承四)年源

頼政が高倉宮を擁立して平家打倒の挙兵をした際、官を守つて奮迅した。そのことは平家物語に詳細に記されている。

時代が経過し、長氏は足利尊氏に従い忠誠を尽くした。その功により一三四〇(暦応三)年に上下村地頭職に任じられている。後に護国山(翁山)に城を築き居城とした。

長氏の家系図の中、小童に関係している部分を抜粋すると次の通りである。



翁山城主長大蔵左衛門元信の弟、長右衛門大夫元則が麓山城に移ってきたことがわかる。このことは土屋家文書の内容と



◆上の写真：麓山城 堀切

出典：よしだっち.com より

も合っている。

備後の長一族は毛利氏に従い歴戦している。しかし、元就の孫輝元が関ヶ原の戦いで敗れ防長二国に移されると、上下長氏は一部を残して輝元と共に萩に移っているが、小童長氏は当地に留まつて土着している。

長氏のように地侍の性格をもつ者は、毛利氏の後を受けた福島正則から、郷土身分の扱いを受けていたが、一六〇四（慶長九）年に兵農分離を目的とした厳しい刀狩りが行われ、それ以後は完全に帰農し、小童村の庄屋など村役人を務めている。



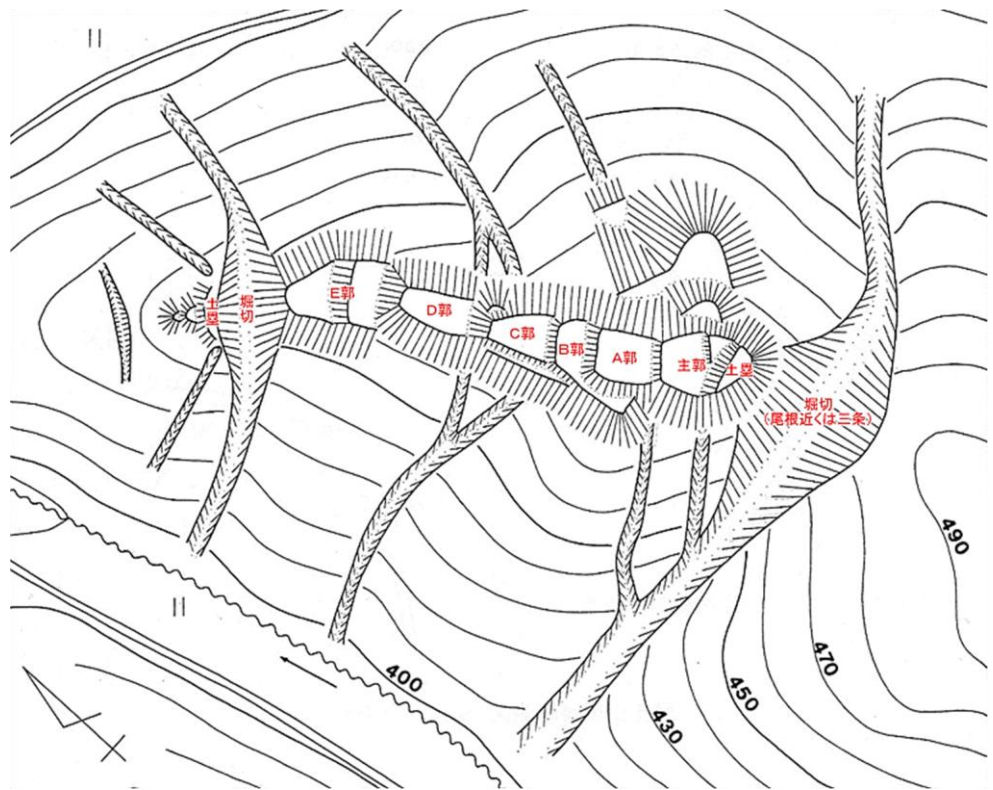
小童の須佐神社に伝わる【須佐神社縁起】には、「一四六九（文明元）年、ふもと城主 綱時」の署名がある。長氏一族と思われるが、元則・元信との関係は不明である。

また、須佐神社裏にある重要文化財「石造宝塔」の礎石に、一五四〇（天文九）年の製作年のほかに、「檀那長谷部氏高連代」とあるが、この長高連についても詳細を知り得ない。



◆上の写真：麓山城 位置

出典：よしだっち.com より



◆上の図：麓山城跡略測図

8 出典：よしだっち.com より

最高所の一郭に高さ三・五メートルの櫓台がある。この一郭から六段の郭が尾根上に並び堀切となる。
南東尾根続きには、深さ三八メートルの大堀切がある。

【参考資料】

・甲奴町誌
・小童村誌
・かながわ考古学財団 中世城郭の歩き方

甲奴の民俗 「亥の子」

十月の初めの亥の日に、昔は「亥の子の祝い」を行った。子孫繁栄や万病除去などを祈る意味があり、主に西日本で行われている行事で、東日本ではあまり知られていない。亥の日が三度ある時は、中の亥の日を祝った。

では、なぜ十月に「亥の子」をお祝いするのか。それは十二支に関係する。

十二支というと「ね・うし・とら・う・たつ・み……」と十二種類の動物を思い浮かべると思うが、本来古代中国の天文学から生まれた【順序】を表す記号である。十二支は、年・月・時刻などを表すのに使われていた。動物の名前が当てられたのは、あくまでも覚えやすくするため。亥も十二支の一つで、亥の月とは旧暦の十月を表す。新暦を採用している現在では、『十一月最初の亥の日』を亥の子としている。

「亥の子の祝い」が日本に伝わったのは平安時代のこと。宮中行事として、貴族の間に広まった。稲刈りの時期と重なるため、農村部へは収穫祭として浸透していった。亥は、動物のイノシシを表し、多産のイノシシにあやかり、子孫繁栄や子どもの成長を願う地域も出てきた。

亥の子餅というのを作り、亥の神に供える。夜に入って男の子どもたちは亥の子石を持って地面を打ち、谷内を回り、柚子や銭をもらう。柚子をもらうと、地面をたたいて喜ぶ。何もくれないと、その家の前で『亥の子の晩に祝わん者は、鬼産め、

蛇産め、角の生えた子を産め、ジャンジャンジャンノ、サンヨウ、サンヨウ』とはやす。

地区の境で、亥の子石の奪い合いを隣の連中とすることもあった。亥の子は子どもたちの営みであるが、大正も半ば頃には廃れてしまった。



◆上の写真：亥の子祭りのようす

◆下の写真：亥の子餅

色・形がイノシシに似ている



亥の子餅は、イノシシの子ども・うり坊に見立てて作られている。起源は古代中国。日本でも平安時代から食べられており、亥の子餅を贈りあう習慣もあったそう。農村では収穫祭と結びついたこともあり、亥の神にお供えし、家族で食べる風習も生まれた。

また亥の子餅は『源氏物語』の第九帖「葵」にも登場。光源氏と紫の上の新婚第二夜が書かれた場面では、ちょうど亥の子餅を食べる日だった。平安の貴族社会での結婚は、男性（婿）が女性の家に通う形で、結婚三日目の夜に餅を食べる『三日夜餅

(みかよもちい)という儀式があつた。

平安時代の亥の子餅は、新米にその年に収穫した下記の七種の作物の粉を混ぜて作っていたそう。

大豆・小豆・大角豆(ささげ)・ごま・栗・柿・糖(あめ)

なお、大角豆とはサヤインゲンに似たマメ科の一種のこと。



十一月ともなると、肌寒くなる。そこで、夏や秋は卓上の風炉を使うが、亥の子の日に炉に切り替える。炉とは、畳の下に備え付ける小さな囲炉裏のこと。

また茶の湯の世界では、新茶の入った壺の封を切り、茶を点てる。これを、『口切の茶事(くちきりのさじ)』という。これらはとても重要な茶事のため、亥の子の日は『茶の湯の正月』や『茶人の正月』とも呼ばれている。

一般家庭でも亥の子の日には囲炉裏や掘りごたつを開く習慣があつた。古代中国の考え方の一つである『五行思想』によると、イノシシは水を表し、イノシシは火を防ぐと考えられ、亥の子の日に火を入れると火事にならないとされていた。

ちなみに令和四(二〇二二年)の亥の子の日は、十一月六日(日)となっている。和菓子屋には亥の子餅が売られていると思うので、子孫繁栄や万病防除、子どもたちの成長を祈りながら、美味しいお茶と一緒に食べてみるのはどうだろうか。

【参考資料】

・小童村誌 ・ウゴゴ



十二支	月		時刻
	旧暦	新暦	
子	11 月	12 月	23～1時
丑	12 月	1 月	1～3時
寅	1 月	2 月	3～5時
卯	2 月	3 月	5～7時
辰	3 月	4 月	7～9時
巳	4 月	5 月	9～11時
午	5 月	6 月	11～13時
未	6 月	7 月	13～15時
申	7 月	8 月	15～17時
酉	8 月	9 月	17～19時
戌	9 月	10 月	19～21時
亥	10 月	11 月	21～23時

手作り！ 亥の子餅の作り方



【材料：十二個分】

- ・もち粉（白玉粉）五〇グラム
- ・グラニュー糖 七〇グラム
- ・水 九〇グラム
- ・いりごま（白） 小さじ二
- ・粒あん 二四〇グラム
- ・きなこ 大さじ三
- ・五
- ・片栗粉

【作り方】

- ① あんこは二〇グラムずつに分けて、細長く丸めておく。
- ② フライパンで白ごまを一分ほど炒って、軽くつぶしておく。
- ③ もち粉と砂糖を耐熱容器に入れ、水を少しずつ加えて、粉の固まりがなくなるまで手でよく混ぜる。
- ④ ラップをかけて、電子レンジ六〇〇ワットで一分加熱して取り出し、水でぬらしたゴムベラでよく練る。
- ⑤ 再び一分加熱して取り出してよく練る。これを三〜四回行い、透明感が出たら求肥の出来上がり。出来た求肥は二〇〇グラム。
- ⑥ 出来た求肥に②のごまを加えて混ぜ込む。
- ⑦ 台の上にクッキングシートを敷き、きなこを広げて、その上に出来た求肥をのせる。
- ⑧ 麺棒に片栗粉をまぶして、求肥を軽く伸ばす。十二等分に分け、手のひらの上で広げ、あんを包む。
- ⑨ しっかりと閉じてなじませる。ひっくり返したらうり坊らしく見える。



ここは
ど
こ
で
し
ょう

上の航空写真は、昭和50年に撮影された甲奴町のある地区の写真です。
さて、ここはどこでしょうか？
よ〜く見るとわかりますよ・・・

甲奴の石造物紀行 Ⅱ 福田 Ⅱ



福田中組新墓地の最下段の竹やぶの中に、宝篋印塔が立っている。甲山甲奴上市線を上川へ向かつて走っていると、右に山が見えるが、この宝篋印塔が立っているのが見える。以前から見てみたいと思っていたので、用で福田上組に行つた際にちよつと寄つてみた。墓地なので、お邪魔しますと一礼して墓地の中を進んでいく。下り坂を下ると二つの石造物がそれである。

下の写真右の宝篋印塔については、【甲奴町石造物シリーズ】で次のように説明がされている。



高さ一三八センチの花崗岩製で重量感のある宝篋印塔である。

この宝篋印塔は大きさ違うけれども、梶田天神平の宝篋印塔とデザインが同じで、恐らく同一の石工によつて造られたものであろう。ただこの宝篋印塔の塔身には、月輪をもつ金剛界四仏が彫刻されている点が異なる。



基礎部分の上部は台形で階段状の造り出しがない。笠の下部にも造り出しはなく、上部も隅飾りからゆるやかなカーブで立ち上がり、造り出しがない。相輪も直径が太く重量感がある。

【金剛界四仏とは】

金剛界とは、密教で大日如来のすべての煩悩を打ち破る強固な力を持つ、智徳の面を表した部門のこと。

四仏とは、大日如来の四方に

鎮座する、

阿閼(あしゅく)如来(ウーン)、

宝生如来(タラク)、

阿弥陀如来(キリク)、

不空成就如来(アク)のこと。



事務局より

- ・会員募集中です。ご紹介ください。
- ・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構です。でお聞かせください。
- ・昔の話や地区の行事など、ご寄稿・お聞かせください。
- ・古い写真や資料等がありましたら、お知らせください。
- ・「甲奴郷土史だより」へ登載していきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子(カーターセンター)

☎〇八四七・六七三・五三五